

# 《11》座談会…子どもを中心としたまちづくり

プロフィール

吉岡 善美  
白百合愛児園園長

1975年社会福祉法人乳児保護協会白百合愛児園保育士として入職。1985年同園主任保育士就任。1993年同園園長就任。  
現在、民生委員・児童委員、主任児童委員、一般社団法人横浜市私立保育園園長会役員(総務)、泉区保育園園長会会長、泉区地域子育て支援拠点すきつが運営法人「特定非営利活動法人ちよこといすみ理事」など。



○三上 今日(今日は)子どもの就学前に視点をおき、待機児童対策に限らず、みなさまの豊富なご経験の中からお話をいただきます。と思っています。まずは自己紹介をお願いします。

○吉岡 私は横浜私立保育園園長会の活動をしています。地域では主任児童委員や子育てネットワークの活動、泉区地域子育て支援拠点の理事と、子育て関係について、いろいろな勉強をさせていただいております。

○田中 私の担当する子育て支援部は、子育て支援、保育所の運営、それと幼稚園とは市の預かり保育の補助で関係があります。保育所・幼稚園と小学校の連携・接続の部分も所管しています。

○原 港北区地域子育て支援拠点どろっぷで施設長をしています。商店街の空き店舗を運営していましたが、その6年後に市の地域子育て支援拠点(46ページ参照)になりました。地域子育て支援事業は、23年度、全18区に揃いましたが、1館目のモデル事業でした。0、1、2歳児が7割以上を占めていて、1日あたり平均70組以上の方が利用しています。保育所、幼稚園、小学校、

中学校との連携も進んできていて、就園前児童を抱える人たちが地域とのつながりや出会いを求めたり、これからのいろんな人たちが子育てを支えるよというメッセージを強烈に発信したりする場にしていきます。

○藤橋 日本ランズエンドはアパレルの通信販売をしている会社で、私のオフィスは港北区にあります。本社がアメリカにある外資系の企業です。正社員は50人ぐらいですが、通信販売なのでコールセンターを持っていて、パート、アルバイトの方が200名くらいいます。コールセンターで働いているパートの方はほとんどが女性で、正社員は男女ほぼ半々です。22年度、23年度、24年度の3年連続でグッズバランス賞を受賞し、24年には継続賞(ブロンズ賞)を受賞したのですが(注1)、その理由は、育児休業を一部有給にしたり、週1回のノー残業デーや、夏に隔週で金曜日は半日で帰っていいよという

「サマーアワー」を設けたり、自分のワーク・ライフ・バランスの充実を図れるようにと子育て支援の取組をしていることでした。私は、人事担当者をしていますので、子育て支援策も担当業務ですが、自身も未就学児の子どもが2人いて、今の会社で産休・育休をとりましたので、子育て支援には個人的にも関心があります。

○岡本 東急電鉄で沿線開発を担当しています。昨年4月に弊社と横浜市で、「次世代郊外まちづくりの推進に関する協定(注2)」を結ばせていただきました。これからの超高齢、少子社会の様々な課題について横浜市と1年間勉強会をしてきた中で、同じような課題があるという共通認識を持ち、産・官・学・民で連携したまちづくりを進めていくという内容です。平成24年6月には、たまプラーザ駅北側の美しが丘一、二、三丁目という、120ヘクタール・約6、500世帯がお住まい

のエリアをモデル地区指定にさせていただき、主に地域の方々と一緒に、まちの将来を考えるワークショップなどを通じて、次世代郊外のまちづくりについて検討を進めている最中です。私自身も23年に娘を出産しまして、この4月に復職しています。住まいは都内ですけれども、認可保育所に入れずに認可外に子どもを預け、親も近くにいらなくてという、働くお母さんの大変なところを体験しているとこ

### 忙しい保護者、外に出ない保護者

○三上 まず、現在子育てしているご家庭や親子関係の現状と課題についてお話しください。

○吉岡 私のところは保育所だということもありますが、何しろ保護者の方は忙しいです。子育てと家事の両立が大変だというのが伝わってきます。朝連れてきたときのお母様の必死な様子、お迎えに来たときの疲れている様子。でも疲れていてもお子さんと会うと顔がぱっと変わる。子どもを非常にかわいがっているというのとは実感としてありますので、忙しい保護者の子育

てをどうサポートしていくのが大切だと思っています。

また、在宅で育児をしている方で積極的に外に行く方は良いのですが、外に出ない方々が心配です。そういう方々に、地域での子育て支援をどう広めていくかが、私のいる地域では課題になっていると感じています。

○田中 今、3歳児で保育施設に通われていない方が13%、4,000人ぐらいいます。エリアによって、幼稚園も保育所も足りないという偏りがあるのかもしれませんが、3歳で幼稚園に入園される方が増えてきています。

○渡邊 ここ最近、多分不景気のために、4歳からの2年保育で入れたいというニーズが少し出てきた感じですが、ただ、2年保育だと入園した時点で周りに友達がいらないから子どもがかわいそうということで、主流は3年保育です。

### 「背負い感」が重くなっていく

○原 親の負担感はどうどんどん深まっていくような気がしています。地域性があるかもしれませんが、港北区では「これが子育てみたいな感じ」を演出するということか、うまく言えないんですけど、出かけるこ

ととか、友達と常に一緒にいることとかを、親子とも本当にそれがしたくてではなく、そういうものに入っていないとより不安だということではないか、「背負い感」みたいなものが年々重くなっていくような気がしています。側にいるだけか、「子どもは社会で育てるのだよ」というようなメッセージを強烈に出していくということがとても必要だと思います。

○渡邊 子どもには本当に素直であつたり純真であつたり、いろんなことを素朴に感じていたり独自の世界があります。その子どもの世界がどんなに侵されていくという危機感があります。ゆつたりと子どもの世界を楽しむという前に、子どもをちゃんと育てなければというので精一杯になつていく。子どもは自分というものを出していけば、けんかも起こるし、人との取っ組み合いもあつたりするのが当たり前なだけけれど、それを当たり前と思えなくなつていくような現実があるのです。

親同士が仲よければ、子どもはけんかするものだよとか、お互いに支え合つて育つていくものだよと思つていくと、温かく社会ができていくので

す。保護者が働いているいないに関係なく、子どもたちが子どもの世界で育つていくことを大事にしましょうというように温かい地域になかなかならないというのが実感です。

### 時間がある育休中に煮詰まる

○藤橋 私は朝8時前に子どもを預けて、夜7時過ぎに迎えに行くという生活をして6年目に入るので、上の子はもう生後5カ月で預け始めてるので、0、1、2歳の頃の子どもと一緒にいる時間が、幼稚園に通っている子とか働いていないお母さんに比べると短かつたと思います。0歳児で入れたのですが、育休中のときのほうが育児雑誌やネットの情報を見る暇があつて、正しい子育てとは何なのかというような情報に惑わされて、煮詰まるところがありました。保育所に入つてからは、子ども同士の兄弟みたいなコミュニケーションがあつて、年長ぐらいになるとお母さん同士も仲よくなつて、日々悩むことも困ることもいっぱいありますけれど、煮詰まるみたいなことは余りないです。

○岡本 私も育児休暇中の約1年間が、社会の情報に一番惑わされていた時期でした。

**渡邊 英則**  
港北幼稚園副園長、ゆうゆうのもり幼稚園園長

横浜市幼稚園協会副会長。港北幼稚園副園長・認定こども園ゆうゆうのもり幼稚園理事長。関東学院大学、國學院大学非常勤講師。主な著書に、『保育方法・指導法』(ミネルヴァ書房)、『保育内容「人間関係」(ミネルヴァ書房)、『いま、幼稚園を選ぶ』(赤ちゃんとママ社)など。



### (注1) グッドバランス賞

市内事業所での積極的な女性の能力活用やワーク・ライフ・バランスの推進を図るために、女性も男性も働きやすい職場づくりを進める中小事業所を、「よこはまグッドバランス賞」と認定し、その取組を広く紹介する制度。

### (注2) 次世代郊外まちづくりの推進に関する協定

横浜市と東京急行電鉄株式会社は、平成24年4月18日に「次世代郊外まちづくりの推進に関する協定」を締結。第1号のモデル地区を、たまプラーザ駅北側地区(横浜市青葉区美しが丘一丁目)に決定し、ワークショップやフォーラムの開催など、取組を進めている。

インターネットを見てしまうと、わけのわからない情報がたくさんありますし、子どもとずっと一緒にいると、「離乳食を全然食べてくれない。どうしよう」とか考えてしまいますが、保育所に行つてからは、「何だ、保育所に行けばちゃんとご飯食べるのね。家ではあまり食べないのね」などと思えるようになって、自分で自分を追い詰めなくて済みます。

たまプラーザという地域で、特に子育て関係の活動をされている方とお話をすると、実はいろんな活動や場が地域にあるのに、それをみなさんが知らないということが一つの大きな問題ではないかと感じています。そこに行けば相談できる人がいると知っているだけでも、特に家庭で育児されている方は救われるのではないかと思いません。

○田中 家庭で子育てされているお母さんは、子どもを預けることへの罪悪感みたいなものを潜在的に持っている場合もあります。パートナーの方からも預けることについて、働いていないのだから必要ないと言われることがある。保育施設への入所以外にも、理由にかかわらず利用できる一時預かりというサービスも設

けているのですけれども、利用者の半数以上の方の理由が「働くため」となっています。気持ちの切りかえられる時間もあるからこそ、向き合うときにはきちんと向き合える、ということが子育てにとって大事です。

○渡邊 時間の問題は、子どもが持っているゆつたりとした時間の感覚に、大人が合わせられるかどうかなのです。幼稚園とか保育所に朝の7時から夜の7時までいたら結構大変なのだけれど、それを全部お母さんに言うわけにはいかない。そこで子どもが聞いて欲しいと思うことをどこまで受けとめたかということが親子関係にとっても大事だと思います。

○吉岡 子どもの世界を大切にするには、母親にそれを受けとめられるだけの力が必要です。私の地域では、地域の人が集まって、お母さんたちをサポートしていこうという取組を始めて3年目に入ります。まずは、子育てのサポートをしている人が集まりましたが、お互い顔が見える関係作りからとなつてしまう会議にだけはしたくないとの思いからすぐにアクションを起こそうと話し合いました。公園遊びを盛り上げようというこ

とになって、何か所かの公園で遊びの場をつくっています。お仕事をリタイアなさった方々がされている連合の役員や民生委員、社会福祉協議会の役員などの方々に集まっていただきながら、この地域では子育て支援をやっているよ、みんなで見守っているよというメッセージを送ろうということで活動しています。お母さんを元気にしないといけないというのは、地域の人たちの共通認識です。決して親を甘やかしているわけではなくて、お母さんが元気になってもらわないと子どもたちも元気に育たないよという思いで、活動しています。

○原 子どもを産む、産まないとか、保育所に預けて働こうか、もしくは、働かないで家で子育てを3歳までやろうかというのをご家庭の選択だと思います。ただ、今「どろっぶ」に来ている方たちを見ると、一部には、ずっと1対1で24時間365日過ごしているのとちょっとやっぱりしんどいから、働くということを選択して保育所に預けたいという方がいらつしやいます。経済状況で働かなければならぬんですが、そういう理由ではなく、子育てがしんどいから

働いて預けようという感じの人たちがいるとしたら、「実は一緒に過ごしていくこともすばらしくて、楽しくて、すごく意義があることなんだ」ということを、拠点の活動の中で伝えていき、子どもを中心とした親自身の肯定的な生き方を選択できて、応援できるような社会になるといいなと思います。

### 子育ての責任を保護者、施設、地域で分担する

○三上 社会全体あるいは地域全体で子育てしていく中でお母さん、お父さんが元気になるようにサポートしていく取組が必要だということが見えてきました。一方で、保育所、幼稚園に預けている保護者の中に、その子の育ちについての責任まで預けてしまうような方が増えているということについて、ご意見をお聞かせください。

○渡邊 何か起こったときに、園が悪くて、ちゃんと見ていてほしかったと言われてしまふということはありません。幼稚園とか保育所で子どもがどんな経験をして、どんな思いをもって、どうやって人間関係を広げていっていかうことや、みんなと一緒に生活



原 美紀  
港北区地域子育て支援拠点「どろっぶ」施設長

横浜生まれ、横浜育ち。学校・会社勤務時代は東京を中心とした生活を送り、第1子の出産を機に退社。2000年に横浜でNPO法人びーのびーの子育て当事者である親達で立ち上げ、仲間と共に「おやこの広場びーのびー」を商店街の空き店舗に開設。2006年に地域子育て支援拠点づくりを市の委託事業として運営。事務局長兼施設長を務める。社会福祉士。現在は「新しい協働を考える会」という研究組織を立ち上げ、契約実務に踏み込んだ協働の第2ステージとしてあるべき姿を模索している。

区の社会福祉協議会ホランテアセンター運営委員、市のバリアフリー検討委員会委員、県のがながわ協働推進協議会委員などを務める。



するということには葛藤があつたりするのだということ、意見を変わるのです。私は保育が管理的になればなるほど、社会性などが育っていない子どもが増えてくる可能性があるのではないかと思つています。

○原 私たちも施設運営していますが、子どもを預けるのか、育てていくとかいうことを、ある程度までは、親に引き受けてもらう。でも親だけでなく、そのこと自体、親の覚悟も含めて、私たちも一緒に引き受けていくよ、応援していくよ、という、その両方が常にバランスよくあることがとても大事だと思つています。

○渡邊 子育ての主体者として保護者が保育に参加するという意識を持つてることが大事という気がするのです。親が日常的に入れるような雰囲気を持つている保育所はい保育所だと思つています。できればお母さんやお父さんも年に1回でも2回でも保育に参加して、「あ、子どもってこうやって生活してるんだ」ということを見たほうがいいと思つています。

○吉岡 今保育所は親との関係がとて難しいと言われて

いますけれども、うちの保育所の保護者の方はとても穏やかです。なるべく親同士が関係をしてくれるような環境づくりを心がけています。保育参観をやつたり、懇談会をやつたりというのは、園の状況を伝えたいというのもあるけれども、親同士の関係をつくつてもらうことが一番大きな目的です。地域で顔と顔が信賴できるといふ関係をつくるというのが一番大切で、それは保育所の中も外も同じだと思つています。

### 課題解決の担い手を見つける

○三上 社会で、あるいは地域で子どもを育てるのだよというメッセージを発している地域が、横浜市の中でたくさん生まれてくるのがいいと思つています。保育所とか幼稚園とか拠点とか、地域の中で子育て支援のネットワークをどうつくつていくのか。その中に行政がどう関与していくか。子育て支援の担い手をどうつくつていくのかというあたりが課題解決の1つのきっかけになると思つています。

○岡本 まさに今課題だなと思つているのが、担い手探しです。特に一番問題なのが男

性の地域活動への参加をどう促すかという点です。いざ会社を退職して「明日から何かしようかな」と思つても、地域に根差したネットワークがある方は少なく、自分から何かを働きかけることが難しい。もっと早い段階から土日ちよつとからでもいいから地域活動に参加してもらう、そういうところから担い手を少しずつ探して、ネットワークをつくつていかなければいけないと思つています。

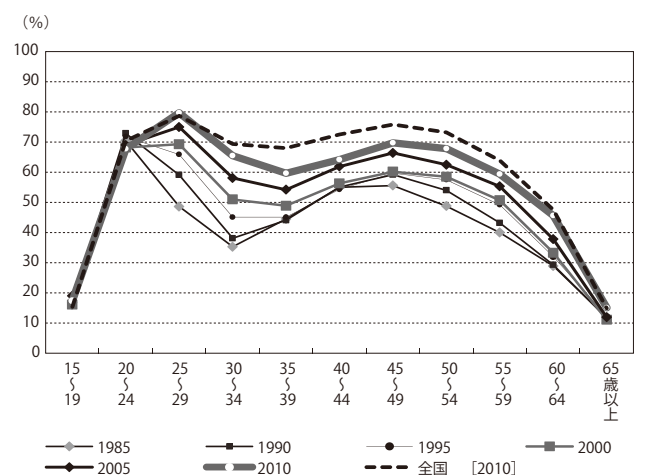
○吉岡 その辺が保育所の父母の会活動が結構担えるかなと思つています。例えば、保育所でおもちつきをするので、お父さんたちは、おもちつきを覚えて子どもと一緒に「卒園」します。そうすると地域のおもちつきのお母さん、やり方を知つているから参加できるのです。それでつながっていくというようながかなりあります。学童も割とそういう結びつきが強いので、そういう方たちがそのままPTA活動や地域の行事のときにも活躍したりという姿がだんだん見られるようになってきました。

○田中 即戦力の人たちを求めめるには、ワーク・ライフ・バランスをどううまく利用するか。育児休業を男性が1カ

月でもとつたときに地域とうまく結びつけるのか。横浜は今まで年齢階級別労働力率のグラフがM字型に落ち込んでいたのですが(図1)、その働いていないかた方々がいろいろな市民活動を支えてくれたという面もありました。ある部分では、育児不安の解消のために、多くの方の社会参加が必要なのかもしれないですね。そういうことを男女問わずに伝えていき先々の投資をしていかないとこれからの社会は厳しいのではないかなと事業を展開する中で感じます。

○渡邊 いろいろな小学校がおやじの会を立ち上げていますが、何々をやるから来てくださーいと言われて行くのではなく、自分たちで「こんなやつていいかな」とかいうような形になっていくと、次の年も「おれらは卒業するけど次の代に任せるね」みたいな話になっていきます。また、「小学校に行つて、今こう活躍している」とかいろいろ

図1 女性の年齢階級別労働力率 (M字カーブ)



藤橋 智子  
日本ランスエンド株式会社人事総務部  
マネージャー  
日系企業、外資系企業の両方を経て、2004年に日本ランスエンド株式会社入社。人事全般を担当する中で、ワークライフバランス支援に取り組む。

話が出てきて、小学校と幼稚園や保育所との中継点になっていくのです。そういうネットワークをつくっていくと、その人たちが次の担い手を探してくれるようになる。そういう仕掛けづくりを考えることが子育て支援ではとても大事だと思っています。

○原 両親教室の参加率もとても高いし、それはむしろ育児を本気でしたい、自分たちの当然の権利なのだと言ってくるパパたちが増えてきていたり、すごくいい流れにはなってきたと思うのです。土曜日には、お昼にお母さんたちと一緒に輪に入ってお弁当を食べて、「きょうの晩ご飯何にする？」とか普通に話している男性がいたりして、時代がだんだん変わってきているなという気はしています。だからこそ父親の出番はイベント的な関わりだけでなく、子どもと過ごすそういう日常をどう応援していくかということだと思っています。

### 父親の育児参加を企業が支援

○三上 藤橋さんのところの男性社員から地域デビューとか、保育所デビューみたいな話を聞いたことはありますか。

○藤橋 私の会社で育児休暇

を取得した男性はまだ2人なのです。それも1週間ぐらいの、有給で旅行に行くのと同じぐらいの期間です。逆に保育所の送り迎えをしている男性は結構多いです。私の子どものクラスでも、父親は多分ほぼ全員お互いに知っていますし、父親同士で飲みに行ったりしています。お互い子どもを泊まりに行かせたり、家族同士でのつき合いもあります。私自身、子どもがいることもあって、会社の子育て支援を推進したいと思い、子どもがいる社員の顔が見える関係づくりをするため、8月に社員が職場に子どもを呼ぶ「ファミリー・デイ」を実施しました。子どもが熱を出したので突然帰るといふようなときに、同僚が子どもを知っていると、かわり方がかわってくると思うのです。マンシヨンの騒音問題でも、お互いあいさつする関係かどうかで、子どもの声や音を騒音と感ずるか感じないかのレベルが違うという話も聞きます。まだ2回、2年やっただけなのですけど、大変好評です。あともう一つ、イントラネットでワーク・ライフ・バランス通信を出しています。「子どもが今何歳で、こんなことが大変だったけど、こんなふうに乗りました」

というようなことを発信すると「あ、この人って実はこんな大変なことがあったのに頑張ってたんだな」とわかるわけです。

○吉岡 保育園から「熱があります」と保護者に連絡するときに、「この時間に電話していいのかな」とか、すごく気を使いながらお電話するので。だから、職場の中でそんな雰囲気をつくっていただけると私たちも嬉しいです。

○藤橋 全社員の理解があるかという点、まだそうではなく、「職場に子どもなんか来たら、うるさくて仕事にならない」と思っている人もいます。そういう意味では、「子どもって、その人だけの子どもじゃなくて社会の財産なんだ」という認識を醸成していかないといけないのではないかと思います。

○田中 企業の取り組みが背景にないと、子育て支援とか担い手づくりも難しいと思います。長時間働いて家に帰ってくるというところを変えて、いろいろなことのバランスをよくしていくかないといけないと思います。

○藤橋 子育て支援という点、どうしても母親とか女性にフォーカスが当たってしまう気がします。男性は働いて、

女性は仕事するかしないにかかわらず子どもとの関係が強いという社会構造があるから、子育て支援というのを声高に叫ばなければいけないのだと思います。乱暴な言い方をすれば、もっと女性が働いたほうがいいと思っています。日本はまだMカーブがありますが、子育て期の女性が働くことが普通になれば、男性だけが育児にかかわらざるを得なくなくなり、企業は優秀な人材確保のためにワークライフバランスへの配慮が必須となります。そういう変化に向けて、また将来的な労働力の確保のためにも、企業側に支援策の充実を求めるだけではなくて、女性側の意識が、働こうという方向に向いてくれるといいなと思います。私自身は自分が働いていてよかったと思うので、子どもがいながら働くのは結構いいよということを個人的にもっと言っていきたいと思っています。

○吉岡 私もずっと子育てしながら仕事をしてきましたが、仕事に没頭すると家のことを忘れられるので、両方でバランスがとれるのです。今の社会では短時間の勤務だとなかなか責任のある仕事を任せられないから、仕事での達成感を得るのは難しいと思う



田中 博章  
こども青少年局子育て支援部長

1981年入庁し、鶴見第二保健所に配属。乳幼児検診、予防接種等の業務に従事。その後、区役所、福祉局、総務局と福祉畑を歩む。2006年の発足時に、こども青少年局へ。子育て支援課長を経て2011年から現職。子ども本位を願い、現場が大好きで、子どもの笑顔を求めてよく出かける。



岡本 洋子  
東京急行電鉄株式会社都市開発事業本部企画開発部課長補佐

都市開発コンサルタントに就職し、まちづくりに携わる。2007年より東急電鉄株式会社にて、二子玉川再開発2期事業の推進等を経て、現在は横浜市と協同で推進する「次世代郊外まちづくり」を担当。地域・行政・企業・大学等が一体となった初めてのまちづくりを実現し、選ばれた沿線日本一を目指して活動中。

のですが、うまくバランスがとれるような社会だといいな  
と思います。また、私が小さい頃は公園まで行って遊ぶのではなく、自分の家の前の道路で遊べたので、ご近所で「あそこ」の家のお子さんはこんな子ね」というのがお互い認識できましたが、そんな町ができたらいいのになと思います。

○原 拠点事業も昔だったら必要がなかったと言われる場です。でも今は放っておいても第三者が出会う場・機会がないわけだから、こういう場をつくるのが大事だと思えます。私は労働対価を得る得ないは別として、働くことや母自身が自分らしくいられるような活動を子育て期にすることには本当に賛成です。納得して、生き方を自分で選んで過ごしているという肯定感が子育てにプラスになるからです。

まちづくり全体の中で子育て支援を考える

○三上 横浜が子育てしやすいまちになるという最終目標に向けて、実現が難しいというところも含めて、最後に一言ずつ「夢」をお聞かせください。  
○岡本 モデル地区の美しが

丘で、アンケートやヒアリングをさせていた中で、保育などの有資格者の方やボランティア精神のある方がたくさんいらっしゃるということが分かりました。実は人材という宝はすでに地域にあって、あとはそれをどう繋げて活かすかです。それには行政や企業が集える場を用意するとか、活動資金の援助をするとか、後押しをしなければいけない。しかし、「子育て支援」とか「高齢者支援」といって行政も縦割りで考えるのではなく地域にとつて本当に必要な施策は何かとエリア全体をどうしていくかをみんなで考える。とりあえず、保育所を1か所造ればよいと考えるのではなく、また、1年、2年で答えを出すのではなく、地域や行政、企業が一体となって、中長期的にまちづくりを続けていかなければならないと思っています。

あつたらいいなと思います。  
○原 親にとつてはたまたま住んだかもしれない町でも、そこで育つ子にとつてはふるさとになるわけですから、大人として親としてできることは最大限尽くしていきたい。難しくいえば市民自治だし、まちづくりという観点で、町内会に入る、学校の委員をやるなど、身の周りの小さなことでもいいので、我が子のため、そこに住む子のために、何か親として大人として主体的に動ける場づくりができる横浜、港北区になっていってもらいたいと思います。  
○田中 施策を考えていくときに、子育て支援という発想をやめて、「子育て支援」と、子ども中心に発想を転換しながら取組を進めていけたらと思っています。  
○渡邊 私は今の子どもたちが窮屈な世界で管理されて育っていくことに危機感を持っていきます。そのことを打ち破るためには、よく「顔と顔が見える関係」と言うように、本当に地域の人たち、いろいろな人たちと出会って連携していくということや園長サイドも含めて考えていかなないと、子どもの生活の幅は広がらないだろうと思っ

ています。  
○吉岡 今、コミュニティが「壊れている」という現実があると思うので、いろいろな担い手がいたとしても、コーディネートする人や集う場所が必要だと思うのです。一生懸命保育所をつくっているのは非常にわかるのだけれども、私は「園庭のない保育所をつくるなんてとんでもない。横浜市は園庭を確保して欲しい」と思っています。子どもたちが外で自由に動ける場所がないなんて、そこがまず間違っている、大きな声で言いたいと思います。  
○三上 横浜は待機児童対策だけでなく、総合的な子育て支援をやっています。みなさんと一緒に汗をかいていきたいと思いたいので、引き続きよろしくお願ひします。長時間、ありがとうございます。  
(平成25年1月10日 横浜市役所会議室にて)



司会

### 三上 章彦

こども青少年局緊急保育対策部長

1982年入庁。戸塚区役所を皮切りに保健所、福祉局、子育て支援事業本部など主に福祉畑を経験。都市経営局在籍時に「待機児童対策プロジェクト」に参画。こども青少年局に移り緊急保育対策を担当し、待機児童ゼロを目指す。自宅では妻一人捨てられていたネコ0匹と共同生活。